

物語文（気持ちの変化） 十六本

一日一本。読み終えたら、本文のすぐあとの課題欄に書きこもう。

- 第一回 転校初日
- 第二回 リレーで抜かれた
- 第三回 母の小言と弁当
- 第四回 絵がうまい友だち
- 第五回 割った花びん
- 第六回 親友の転校
- 第七回 ぶっきらぼうな父
- 第八回 兄の部活
- 第九回 初めての塾のクラス
- 第十回 ピアノの発表会でまちがえた
- 第十一回 厳しいコーチ
- 第十二回 兄の成績
- 第十三回 友だちをかばえなかった
- 第十四回 祖父の死
- 第十五回 無口な祖母
- 第十六回 姉の受験勉強

第一回 転校初日

転校一日目の朝、わたしは先生のあとについて、長いろうかを歩いた。前の学校よりも、ろうかがずつと長く感じられた。教室の前を通るたびに、中から知らない子たちの声が聞こえてくる。わたしは何度も、自己紹介じこしょうかいで言うことを頭の中でくり返した。

「ここが、ゆいさんのクラスよ」

先生が戸を開けると、知らない顔がいつせいにこちらを向いた。わたしはスカートのすそを、ぎゅつとにぎりしめた。

「今日からこのクラスの仲間になる、ゆいさんです」

先生にうながされて、わたしは黒板の前に出た。三十いくつの目が、じつとわたしを見ている。顔が熱くなって、ひぎが少しふるえた。わたしは緊張きんじょうで、先生の声もよく聞こえなかった。

「……ゆいです。よろしくおねがいします」

好きな本のこと、飼っているねこのことも、話すつもりで用意してきた。けれども、声がのどのおくでつかえて、それ以上は出てこなかった。小さな拍手はくしゅの中、わたしは下を向いたまま、教えられた席についた。となりの席の女の子が、ちらりとこちらを見た。

昼休みになると、みんなは校庭へ出ていった。わたしは席にすわったまま、心細くてたまらなかった。校庭からは、楽しそうな声が聞こえてくる。前の学校なら、今ごろは図書室で友だちと本の話をしている時間だ。ノートを開いて何かを書くふりしても、えんぴつの先は同じところをなぞるばかりだった。

足音がして、となりの席のみおがもどってきた。朝、こちらを見ていた子だ。名札には、みお、と書いてある。

「ゆいちゃん、ドッジボール、一人足りないの。いつしよにやらない」

わたしは顔を上げたが、すぐには声が出なかった。

「……わたし、ボール、あんまりうまくないよ」

「だいじょうぶ。わたしだって、すぐ当てられるもん。わたしもね、三年生るとき、この学校に転校してきたの。最初の日、ずっと自分の席にいて、だれかに声をかけてほしかったんだ」

みおは、ほおを少し赤くして笑った。

胸の中で固まっていたものが、すつとほどけていった。みおも、わたしと同じ昼休みをすごしたことがあったのだ。うれしいのに、前の学校の友だちの顔が急にうかんで、目のおくが熱くなった。わたしはあわてて、まばたきをした。

「行く」

ノートを閉じて立ち上がると、窓の外で雲の切れ間から日がさして、校庭の白い線が光って見えた。わたしはみおのあとを追って、階段をかけおりた。下から、みんなの声が近づいてきた。

第一回 転校初日 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第二回 リレーで抜かれた

運動会のクラス対抗リレーで、ぼくは四番目の走者だった。ぼくはクラスでいちばん足が速いと言われていた。スタートの前から、心臓の音が耳のおくでひびいていた。

バトンを受け取ったとき、ぼくたちのクラスは一位だった。前にはだれもない。応援席から、ぼくの名前を呼ぶ声が聞こえる。ぼくは必死で腕をふった。

最後のカーブに入ったとき、後ろから足音が近づいてきた。ぼくは思わずふり返った。その一瞬で、三組の蓮がぼくの横に並び、そのまま前へ出た。追いかけたけれど、背中はずっとはなれていった。アンカーの拓海にバトンをわたしたとき、ぼくたちは二位になっていた。拓海も最後まで追ったが、クラスはそのまま二位でゴールした。ゴールの向こうで、三組の子たちがとび上がってよろこんでいるのが見えた。

応援席にもどるとき、ぼくはだれの顔も見られなかった。くやしくて、手のひらにためあてがつくほど、こぶしをにぎりしめていた。ふり返らなければよかった。何度も、そればかり考えた。

運動会が終わった夕方、ぼくは一人で校庭のすみにすわっていた。テントはもう片づけられて、トラックの白線だけが残っている。ぼくは、蓮にぬかれた最後のカーブを、ずっと見ていた。あとき、ふり返りさえしなければ。

「悠斗、まだいたのか」

拓海が来て、ぼくのとなりにこしを下ろした。ジャージのひぎに、まだ土がついている。

「二位だって、すごいじゃん。そんな顔するなよ」

「……ぼくがぬかれなかったら、一位だった」

拓海は少しだまってから、言った。

「蓮って、去年はそんなに速くなかったよな。毎朝、川ぞいの道を走ってるらしいよ。学校に来る前に」

ぼくは、はっとした。毎朝、登校のとき、川ぞいの道を一人で走っている子がいた。青いジャージを着ていた。雨の日も、かさをささずに走っていた。ぼくは友だちと笑いながら、それをながめていた。あれは、蓮だったのだ。

くやしきは消えなかった。けれど、そのおくで、何かがすっきりしていくのもわかった。蓮は毎朝走っていて、ぼくは笑って見ていただけだった。ぬかれた理由が、やっとわかったからだ。

「拓海。明日の朝、ぼくも川ぞいの道を走ってみる」

「じゃあ、ぼくも行く。アンカーだからな。来年は、二人で三組をぬかそうぜ」

校庭を、すずしい風がふきぬけていった。胸の中のもやもやが、風と一っしょに運ばれていくようだった。ぼくは立ち上がって、大きく息をすった。明日は、いつもより一時間早く起きよう。

第二回 リレーで抜かれた 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第三回 母の小言と弁当

「拓也、ハンカチは持ったの。水とうは。しおりは」

遠足の朝、台所でパンをかじっていると、母の声が後ろから追いかけてきた。ぼくは返事をしないで、牛乳を一気に飲んだ。テーブルの上には、母が書いた持ち物のメモまで置いてある。

「返事くらいしなさい。それに、ねぐせがついてるよ」

「わかってるって。毎朝、同じことばかり言わないでよ」

ぼくはコップを流しに音を立てて置いた。五年生にもなって、忘れ物の確認をされるのはうんざりだった。流しには油の入ったなべと皿が重なっていたけれど、ぼくはろくに見もしなかった。

「はい、お弁当。かたむけないでね」

母が包みを差し出した。ぼくは中も見ずにリュックにつっこみ、「行ってきます」も言わずに玄関のドアを閉めた。外に出ても、母の声がまだ耳の中で鳴っている気がして、ぼくはわざと大きな足音を立てて歩いた。

昼になって、ぼくたちは丘の上でシートを広げた。リュックの底から弁当を取り出すと、包みが少しななめになっていた。ぼくはあわてて結び目をほどき、ふたを開けた。

からあげが四つ、すみに寄っていた。その横には、ぼくの好きなあまい卵焼きもある。ミニトマトは、へたがきちんと取ってあった。

「拓也の弁当、うまそうだな」

となりの友だちがのぞきこんだ。ぼくは「まあね」とだけ答えて、からあげを一口に入れた。冷めた衣から、しょうゆとしょうがのにおいがした。

きのうの夜、テレビを見ながら「からあげ食べたいな」とつぶやいたのを、ぼくは思い出した。母は洗い物をしながら、あれを聞いていたのだ。そういえば、今朝はまだ暗いうちから、台所で油のはねる音がしていた。ぼくはふとんの中でそれを聞きながら、またねむってしまったのだった。

ぼくははしを持ったまま、しばらく動けなかった。あんなふうに言い返したことが、急に胸にささった。それなのに、からあげはうまい。申し訳ないのに、口のはしがゆるんでしまう。

そのとき、雲の切れ間から日がさして、弁当箱のふたがきらりと光った。丘をわたる風が、ほおにすずしかった。さつきまで重かった胸の中を、その風が通りぬけていくようだった。

ぼくは残りのからあげを、一つずつゆっくり食べた。卵焼きも、はしっこまできれいに食べた。帰ったら、まず「からあげ、うまかった」と言おう。それから、朝のことをあやまろう。

第三回 母の小言と弁当 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第四回 絵がうまい友だち

朝、ろうかを通ると、また葵^{あおい}の絵の前に人が集まっていた。先月のコンクールで金賞をとった絵だ。夕焼けの空が水でにじんで、オレンジとむらさきがとけ合い、本物よりもきれいに見える。

「葵ちゃん、すごいね。プロみたい」

だれかの声が聞こえて、わたしは早足でその前を通りすぎた。ふり返らないようにしたのに、あの空の色は、教室に着いてもまぶたに残っていた。わたしだって、小さいころから絵をかくのは好きだった。でも、あんな空は一度もかけたことがない。

写生会の絵は、来週までにしあげなければならない。わたしは、葵と同じように空をにじませてみようと思った。

放課後の図工室で、わたしは窓の外のけやきをかいていた。筆にたつぷり水をふくませて、空に色を落とす。でも、色はまだらに広がって、紙はしわしわにふくらんだ。もう一度やっても、同じだった。わたしは筆をバケツにつつこんで、ぐるぐるとかき回した。水がにごって、灰色になった。

窓の外の空も、いつのまにか厚い雲におおわれていた。けやきの葉が、風にあおられてざわざわと鳴っている。

「千夏^{ちなつ}、まだ残ってたの」

ドアが開いて、葵が入ってきた。わたしは画用紙を手でかくそうとしたが、まにあわなかった。

「……葵のまねしたんだけど、全然だめ」

葵はだまって絵をのぞきこみ、下のほうを指さした。けやきの根もとで、ボールを追いかける一年生を、わたしは小さくかいていた。空がうまくいかないあいだに、何となくかき足したものだ。

「ここ、すごいいい。この子、本当に走ってるみたい」

「そんなの、ついにかいたただけだよ」

「わたし、人をかくとかたまっちゃうんだ。みんな気をつけしてるみたいになるの。千夏のかく人は、いつも動いてるよね。前から、いいなあって見てたんだ」

わたしは、自分の絵をもう一度見た。空はまだらなのに、一年生たちは、今にも笑い声が聞こえてきそうだった。ボールを追う子のぼうしが、走りたいきおいでずれている。

あの葵に「いいなあ」と言われるなんて、考えたこともなかった。顔がかつと熱くなって、わたしは下を向いた。はずかしいのに、口のはしが勝手に上がってしまう。

「……もう一まい、かき直す。今度は、人をいっぱいかく」

わたしは新しい画用紙を取り出して、えんぴつをにぎった。空は、うすく一回ぬるだけにしよう。葵はとなりのいすを引いて、わたしの手もとをのぞきこんだ。

第四回 絵がうまい友だち 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第五回 割った花びん

日曜日の昼、ぼくはろうかでボールをけつていた。外は雨で、公園に行けなかったのだ。家の中ではやめなさいと、何度も言われていたのに。強くけつたボールがげた箱に当たり、上にあった青い花びんが落ちた。かわいた音がして、花びんはいくつにも割れた。

「健太、今の音、何」

台所からお母さんが走ってきた。エプロンで手をふきながら、ろうかのかけらを見て目を丸くした。ぼくはボールを背中にかくしていた。

「窓から風が入って、落ちたみたい」

自分でもおどろくほど、すらすらと言葉が出た。お母さんは少しもうたがわずに、「けががなくてよかった」と言った。そして、かけらを一つずつ拾い、おかしの空き箱に入れた。その箱は、台所のたなの上に置かれた。

それから三日、ぼくはお母さんの顔をまつすぐ見られなかった。ごはんのときも、テレビのほうばかり見ていた。宿題をしても、ゲームをしても、あの割れる音が、何度も頭の中でひびいた。たなの上の箱が目に入るたびに、むねの中が重くなった。

三日目の夜、ぼくがおふろから出ると、お母さんが台所のテーブルで箱を開けていた。テーブルには、新聞紙が広げてあった。かけらをならべて、接着剤せっちやうやくでつなぐとしている。

「やつぱり、むずかしいね。これ、おばあちゃんがくれた花びんの」

お母さんは小さく笑った。そのとき、外で強い風がふいて、窓ががたと鳴った。その音が、ぼくのついたうそを、何度も言い返しているように聞こえた。

ぼくはパジャマのすそをにぎった。言わなければいけない。でも、言ったらしかられる。手のひらに、じつとりとあせがにじんだ。足がゆかにはりついたように動かなかった。

「お母さん」

声がかすれた。お母さんが顔を上げた。

「花びん、風じゃないんだ。ぼくがろうかでボールをけつて、割った。うそついて、ごめんなさい」

言い終わると、目のおくが熱くなった。鼻のおくがつんとする。お母さんはしばらくだまっていたが、やがて接着剤のふたをしめた。

「話してくれてありがとう。うそは、もうなしね。約束よ」

「……うん」

「じゃあ、手伝って。健太のほうが、指が細いから」

ぼくはお母さんのとなりにすわって、小さなかけらをつまんだ。しからなくてうれしいのに、なぜかなみだが止まらなかった。かけらを合わせるたびに、三日間むねにつかえていたものが、少しずつ軽くなっていった。最後のかけらがはまったとき、お母さんと目が合って、二人で少し笑った。

第五回 割った花びん 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第六回 親友の転校

大輝^{だいき}が遠くの町へ転校していったのは、夏休みの終わりだった。

一年生のころから、二人は毎日のように河原^{かわら}でキャッチボールをした。大輝の投げる球は、いつも少しだけ高くういた。最後の日、大輝は使い古したボールを翔太^{しょうた}にほうつてよこした。白い皮に、大輝の字で「またな」と書いてあった。

それから翔太は、河原に行かなくなった。ボールはつくえの引き出しのおくに入れたまま、一度も出さなかった。教室で大輝の席を見ないように、授業中は窓の外ばかり見ていた。夜、ふとんに入ると、グローブにボールが入るときの音を思い出して、なかなかねむれなかった。

十月に入ったある日、学校から帰ると、げた箱の上に手紙が置いてあった。ふうとうの字を見て、翔太はランドセルをせおったまま、それを開けた。

「こっちでも野球チームに入った。キャッチボールの相手もできた。でも、おまえみたいにまっすぐな球を投げるやつはいない。あのボール、なくすなよ」

翔太は手紙を二回読んだ。手紙を持つ手に、少し力が入った。大輝が元気なのはうれしい。けれど、大輝の球を、今はだれかほかのやつが受けている。うれしいのか、さびしいのか、自分でもよくわからなかった。

翔太は自分の部屋に行き、引き出しを開けた。ボールは、しまったときのまま、おくのほうに転がっていた。手に取ると、思っていたより軽かった。

夕方、翔太はボールを持って、一か月ぶりに河原へ行った。

川の水は夏よりも細くなり、土手のすすきが風にゆれていた。夕日が水面を赤くそめて、遠くで鉄橋をわたる電車の音がした。

二人でいつも使っていた、コンクリートのかべの前に立つ。

翔太はボールを投じた。ボールはかべに当たって、ぽんと手元にもどってきた。もう一度投げる。また、もどってくる。少しうき上がって返ってくる大輝の球とは、まるでちがった。

「……なくすわけ、ないだろ」

翔太は小さくつぶやいた。その声は、川の音にすぐ消えた。

翔太はもう一度、ボールを投じた。今度は、大輝がいつも立っていたあたりをねらって、少し高く。ボールはかべの上のほうに当たって、翔太の頭の上をこえ、草むらに落ちた。翔太は草をかき分けて、それを拾った。

何度も投げているうちに、空の色がこくなっていった。大輝はもう、ここには来ない。そのことが、さつきよりも静かにむねの中におさまっていた。

翔太はボールの「またな」の字を親指でなぞってから、ポケットに入れた。そして、暗くなりはじめた土手の道を、ゆつくりと歩いて帰った。

第六回 親友の転校 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第七回 ぶつきらぼうな父

土曜日の夜、ぼくは夕飯の席で、その日の試合の話をした。四年生でサッカーを始めてから、初めてゴールを決めたのだ。

「右からけつたら、キーパーの手の先をぬけたんだよ。みんながかけよってきて、背中をばんばんたたかれた」

父ははしを動かしたまま、「そうか」と言った。

ゴールのあと、ぼくはすぐにフェンスの外を見た。ほかの子の家族は、立ち上がって手をふっていた。けれど、その中に父の顔はなかった。父は今日も、仕事だと言って朝早く出かけていったのだ。

「それだけの。ぼく、初めて点を入れたんだよ」

「よかったな」

父はもうテレビのニュースを見ていた。ぼくは返事をしないで、ごはんを半分残して席を立った。部屋のドアを閉める音が、思ったより大きくひびいた。ベッドにもぐつても、父の「そうか」が耳に残って、なかなかぬれなかった。

夜おそく、のどがかわいて台所へ行った。父はもうねたらしく、家の中は静かだった。テーブルの上に、父の黒い手帳が置きっぱなしになっていた。

いつも仕事の予定を書いている手帳だ。見てはいけないと思ったけれど、開いたページのすみに、ぼくの名前が見えた。

「悠斗 初ゴール 右足 前半十二分 いい顔をしていた」

ぼくは手帳を手にとった。前のページにも、その前のページにも、試合のことが書いてあった。「負け 最後まで走っていた」「声がよく出ていた」。日付を見ると、どれも父が仕事だと言っていた土曜日だった。

そういえば、フェンスのいちばん遠く、大きな木のかげに、作業服の人が立っていた気がする。父は仕事のとちゅうで、あそこからぼくの試合を見ていたのだ。試合の始まる時間だけは、父がいつも母に聞いていたことを思い出した。

ぼくはしばらく、手帳の小さな字を見つめていた。うれしいのに、さつきドアを強く閉めたことを思い出すと、胸がちくりといたんだ。

「何してる」

ふり向くと、父がねむそうな顔で立っていた。ぼくはあわてて手帳をとじて、テーブルにもどした。

「お父さん、来週も試合だよ。……また点、取るから」

父は少しだまってから、「そうか」と言った。そして冷蔵庫から麦茶を出して、ぼくのコップにもついでくれた。さつきと同じ「そうか」なのに、今度はちがう言葉に聞こえた。

窓の外を見ると、雨はいつのまにかやんでいた。ぬれた道が、街灯の光を受けて、やわらかく光っていた。

課題一

気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二

気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第八回 兄の部活

春の演奏会^{えんそう}で、陽太^{ようた}は初めて、兄の大輝^{だいき}がトランペットをふくところを見た。体育館の明かりが少し暗くなり、兄が一人で立ち上がった。金色の楽器が光を受けて、高い音がまっすぐのびていく。陽太はひざの上でこぶしをにぎったまま、息をするのも忘れていた。

演奏が終わると、陽太はだれよりも大きく手をたたいた。中学生になったら、ぼくも吹奏楽部^{すいそうがくぶ}に入つて、兄ちゃんみたいにソロをふく。帰り道、陽太は何度もそう口にした。

夏休みに入つてすぐの夜、兄はなかなか帰つてこなかった。陽太が玄関^{げんかん}で待っていると、九時近くになつて、やつとドアが開いた。

「兄ちゃん、おそかったね」

兄は返事をしないで、楽器のケースをゆつくり下ろした。口びるのはしが赤くはれて、少し血がにじんでいた。シャツの背中中、あせでぐつしよりぬれていた。

陽太は、部屋に入つた兄のあとをついていった。つくえの上のノートには、「高いド 二十回」「タンギング 五十回」と、細かい字がびっしりならんでいた。ページをめくつても、めくつても、同じような字がつづいていた。

「毎日、同じところを百回ふくんだ。それでも今日、大会のソロは、ほかのやつに決まった」

兄はそう言つて、ノートをとじた。陽太はあの金色の光を思い出そうとした。けれど、目に入るのは兄のはれた口びるばかりだった。ふくらんでいた夢が、空気のぬけた風船のようにしぼんでいた。

「……そんなに大変なら、ぼく、やめとこうかな」

兄はしばらくだまっていた。それから引き出しを開けて、銀色の小さな部品を取り出し、陽太の手にのせた。

「マウスピース。ふいてみる」

陽太が思いきり息をふきこむと、ぶう、とおかしな音が出た。兄が、今日初めて笑つた。

「おれも最初はそうだった。でもな、一回いい音が出ると、やめられなくなる」

兄はケースからトランペットを出して、窓を開けた。音をおさえて、演奏会でふいた曲の始まりを短くふいた。はれた口びるのせいで、少しかすれた音だった。それでも、あの日と同じメロディだった。

開いた窓から夜の風が入ってきて、カーテンを大きくふくらませた。

陽太は、手の中のマウスピースをにぎりしめた。あんなに大変なのは、正直こわい。それなのに、胸のおくのどきどきが止まらなかった。

「兄ちゃん、もう一回、ふいてもいい」

兄は「何回でも」と言つて、窓の外を見たまま、もう一度トランペットをかまえた。

第八回 兄の部活 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第九回 初めての塾のクラス

健太^{けんた}が塾^{じゅく}に通い始めて、今日で三回目だった。学校の友だちはだれもいない、知らない子ばかりのクラスだ。

教室に入ると、ほかの子たちはもう席について、問題集を開いていた。だれも健太のほうを見ない。健太は小さくせきばらいをして、自分の席にすわった。となりの大輝^{だいき}は、えんぴつをくるくる回しながら問題を読んでいた。まだ、ほとんど話したことはない。

授業が始まると、先生の説明はとても速かった。黒板の式を写しているうちに、もう次の問題に進んでいる。学校の授業とは、まるでちがった。まわりからは、えんぴつの走る音だけが聞こえる。健太は、自分だけが取り残されていくようで不安だった。消しゴムを持つ手に、じつとりとあせがにじんだ。

最後に、算数の小テストが返ってきた。十問のうち、正解は三問。赤いバツが、ページの半分以上をうめている。健太は答案を二つにおつて、急い^{つゝ}で机^{つくえ}の中におしこんだ。

休み時間になった。前の席の子たちが、さつきのテストの答えを言い合っている。七番はかんたんだった、という声が聞こえた。健太は窓のほうを向いた。外はもう暗く、ガラスには教室の明かりと、うつむいた自分の顔がうつっていた。

「それ、さつきの小テスト」

大輝が、机の中からはみ出した答案のはしを指さした。

「……うん。三問しかできなかった」

健太は、大輝の顔を見ないで答えた。耳まで熱くなるのがわかった。はずかしくて、このまま帰ってしまいたかった。

大輝はかばんの底をぐそぐそさがして、くしゃくしゃの紙を一枚取り出した。赤いバツが、ずらりと並んでいる。

「ぼくが四月に入ったときの、最初のテスト。ほら、ゼロ点。最初はみんなそうなんだよ。この問題、学校とやり方がちがうから。ぼくなんか、一か月は毎回泣きそうだった。でも、わからないところを先生に聞きに行っていたら、だんだん解けるようになったんだ」

大輝はそう言つて、歯を見せて笑った。

健太は思わずふき出した。ゼロ点の答案を自慢^{じまん}そうに見せる大輝がおかしくて、それなのに、のどのおくがぎゅつとなった。できないのは、自分だけではなかったのだ。健太はほつとして、肩^{かた}から、すつと力がぬけていくのがわかった。

健太は机の中から答案を引っ張り出し、しわをのばして大輝の前に広げた。

「この三番、どうやるの」

「ああ、それはね、図をかくんだよ」

大輝がイスを寄せてきて、答案のすみに小さな四角をかき始めた。健太は、その手もとをじっと見つめた。さつきまで速すぎた先生の説明が、少しずつ頭の中でつながっていった。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十回 ピアノの発表会でまちがえた

美咲の番が来た。舞台のそでで待っているあいだ、指先はずっと冷たかった。まぶしいライトの中を歩いて、美咲はピアノの前にすわった。前の子のきれいな演奏が、まだ耳に残っていた。

客席は暗くて、だれの顔も見えない。美咲はひざの上で両手を一度にぎってから、けんばんの上に指を置いた。客席の後ろのほうで、だれかが小さくせきをした。

弾き始めは、うまくいった。半年かけて、毎日練習してきた曲だ。指は、考えなくても動いた。先生にも、もうだいじょうぶ、と言われていた。

ところが、曲の真ん中に来たとき、右手の指がとなりのけんばんをおした。にごった音がひびいた。あわてて弾き直そうとして、指が止まった。会場が、しんとまった。頭の中が、真っ白になった。

一息をすって、美咲はもう一度弾き始めた。それからあとのことは、よく覚えていない。気がつく最後の音が消えていて、ぱらぱらと拍手が聞こえていた。おじぎをするとき、美咲は客席を見ることができなかった。

帰り道、美咲は妹のひなと二人で、夕方の道を歩いた。花束をかかえたまま、ずっと足もとを見ていた。くやしくて、口を開いたら泣いてしまいそうだった。あのにごった音が、何度も耳のおくでよみが出る。かかえた花束が、やけに重かった。

「おねえちゃん、なんでずっとだまつてるの」

「……まちがえたから。あんなに練習したのに」

ひなは、少し首をかしげた。それから前を向いて、小さな声で歌い始めた。美咲は思わず足を止めた。

ひなが歌っているのは、美咲がまちがえた、すぐあとのところだった。指が止まって、もう一度弾き始めたところ。そこから最後までメロディーを、ひなはまちがえずに歌っていた。

「ひな、その曲、覚えたの」

「うん。ここ、いちばん好き。おねえちゃん、家でいつも弾いてたもん。ひな、おふろでも歌ってるよ」

美咲は、花束をぎゅっとかかえ直した。まちがえた音は、まだ耳のおくで鳴っている。それなのに、ひなの歌を聞いていると、口もとがゆるんでしまう。くやしいのに、少しうれしかった。止まったあとに弾いた音も、ちゃんとひなにとどいていたのだ。

西の空の雲が切れて、ひなの横顔がふつと明るくなった。

「ひな、帰ったら、もう一回弾く。まちがえたところから。次は、止まらないで最後まで」

「じゃあ、ひなが聞いてあげる」

美咲はひなの手をにぎって、少しだけ早足になった。家までの道が、来たときよりも短く感じられた。

第十回 ピアノの発表会でまちがえた 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十一回 厳しいコーチ

「遥、足が止まってる。もう一本」

森^{もり}コーチの声が、体育館にひびいた。ほかの子がシュートを外しても何も言わないのに、遥にだけは、いつも注意が飛んでくる。六年生の遥は返事をせずに、列の後ろにもどった。ボールをにぎる手に、ぎゅつと力が入った。

「左。また右に逃げたぞ」

二回目の注意で、遥はボールを床^{ゆか}に強くついた。となりの子が、ちらりとこちらを見た。遥はコーチのほうを見ないようにして、次の順番を待った。どうして自分ばかりなのか、さっぱりわからなかった。

練習の終わりに、コーチは笛を首から外しながら言った。

「遥は残れ。左手のドリブル、あと十分」

みんながくつをはきかえて帰っていく。くつ箱のほうから笑い声が聞こえて、遥は口をとがらせた。きのうも、おともいも残された。もう、バスケットをやめてしまいたいくらいだった。

だれもない体育館は、しんとしていた。遥のつくボールの音だけが、やけに大きくひびいて、かべからはね返ってくる。高い窓から入る光も、もううすくなっていた。

「もつと低く。目は前だ」

「……コーチは、わたしのことがきらいなんですか」

口に出してから、遥はしまったと思った。ボールが手からはなれて、コートすみに転がっていった。コーチは何も言わずに、ボールを拾いに行った。そのとき、ベンチのノートが床に落ちた。遥が拾うと、開いたページに自分の名前があった。

日づけの横に「左手、十回」「十五回」「顔が上がってきた」と、細かい字がならんでいる。ページをめくっても、遥の名前は三か月前から一日も欠けていなかった。ほかの子の名前もあったが、遥のところがいちばん長かった。

「右手なら、遥はだれにも負けない。止められるのは、いつも左に追いこまれたときだ。そこさえ直れば、もつと上に行ける」

コーチはボールを遥にわたして、ぼそりと言った。それから、少しこまったように頭をかいた。

遥はノートを両手で持ったまま、うつむいた。顔が熱くなった。あんなことを言ってしまった、はづかしい。それなのに、胸のおくがあたたかくて、口もとがゆるみそうになる。

「……もう一回、お願いします」

遥はノートをベンチにもどし、ボールを受け取った。左手でつくつと、ボールはさつきより少しまっすぐ、遥の手にもどってきた。一回、二回、三回。遥は顔を上げて、コーチの立っているほうを見た。

第十一回 厳しいコーチ 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十二回 兄の成績

「直人、また学年で一番だつて。すごいじゃない」

夕ごはんのテーブルで、母が兄の成績表を広げた。父もはしを置いて、「中二でこれなら、たいしたものだ」とのぞきこんだ。兄は「たまたまだよ」と言いながら、からあげに手をのぼした。

六年生の翔太は、みそしるのおわんに顔を近づけた。ランドセルの中には、六十二点の算数のテストが、四つにたたんで入っている。兄は小学生のころ、九十点より下をとったことがなかったと、前に母が話していた。

「翔太は、テストどうだったの」

「……まだ返ってきてない」

翔太はごはんを口いっぱいにはおぼつて、それ以上聞かれないようにした。

その夜、翔太は机に向かっていた。兄と同じように、色ペンを三本使ってノートをまとめてみる。赤は大事なところ、青は公式、緑は先生の話。けれど、線を引くほどページはごちゃごちゃになった。兄のノートは、どのページもきれいに整理されていたのに。何回読み返しても、中身は少しも頭に入っていない。

窓の外では、雨が細く降り続いていた。ガラスをつたうしずくが、いつまでも止まらなかった。翔太は色ペンを放り出して、机につつぶした。

「翔太、まだ起きてるか」

兄が、目覚まし時計を持って入ってきた。

「これ、急に動かなくなつたんだ。直せるか」

翔太は体を起こし、引き出しを開けた。ドライバーやピンセットが、大きさの順にならんでいる。小さなドライバーを取り出して、裏のねじを外すと、電池のばねが曲がっているのが見えた。ピンセットでそつと起こして、ふたを閉める。秒針が、こちこちと動き出した。

「やつぱりすごいな。おれ、こういうの全然だめなんだよ。この前のラジオも、翔太が直してくれたよな。おまえの手、魔法みたいだ」

兄は時計を耳に当てたまま、しばらく動かなかった。翔太は手の中のドライバーを見つめた。兄にほめられたのは、いつ以来だろう。顔が熱くなって、どこを見ていいかわからない。照れくさいのに、胸を張りたくもなる。

「……ほかに、こわれてるものがあつたら持つてきてよ」

「じゃあ、今度は自転車のブレーキを見てくれよ。キーキーうるさいんだ」

兄が出ていくと、翔太は色ペンを一本だけ残して、あとは筆箱にしまった。それから、たたんだテストをランドセルから出して広げた。まちがえた問題を、自分のやり方で、一つずつ解き直しはじめた。

第十二回 兄の成績 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十三回 友だちをかばえなかった

休み時間、由香が新しい筆箱を机の上に出した。花のもようの布でできていて、口のところに小さなボタンがついている。由香はボタンを外して、中からえんぴつを一本ずつ出してならべた。

「おばあちゃんがぬってくれたの。ボタンも、おばあちゃんがえらんだんだよ」

由香がそう言ったとき、後ろの席の女の子たちが、いすから身を乗り出してのぞきこんだ。

「なにそれ、赤ちゃんみたい」

何人かが声を立てて笑った。教室のあちこちから、くすくすという声が聞こえた。由香は筆箱を両手でつつんで、だまつてしまった。

わたしは、そのすぐ横に立っていた。前日、由香の家でその筆箱を見て、「かわいいね」と言ったばかりだった。おばあちゃんが一晩でぬってくれたのだと、由香は何度も話してくれた。何か言わなきゃ。そう思うのに、口が動かない。気がつくと、わたしもみんなに合わせて、口のはしだけで笑っていた。

由香が顔を上げて、わたしを見た。何かを待っているような目だった。わたしは、すぐに目をそらした。

それから二日、わたしは由香をさけていた。ろうかで会いそうになると、遠回りをした。授業中も、二つ前の席の由香のせなかが気になって、先生の話が少しも頭に入らなかった。いっしょに帰ろうときそわれても、用事があると言つてことわった。

三日目の放課後、げた箱に行くと、由香が一人でくつをはきかえていた。朝からふっている雨の音が、げた箱の中にまでひびいていた。

わたしは手さげのひもを、ぎゅつとにぎりしめた。今言わなかったら、ずっと言えない気がした。こわかったけれど、わたしは一步前に出た。

「由香」

由香の手が止まった。

「おととい、何も言えなくて、ごめん。いっしょに笑つて、ごめん。わたし、あの筆箱、本当にかわいいと思つてる」

言いながら、顔が熱くなった。なみだがこぼれないように、くちびるをかんだ。由香はくつのかかとを指でおさえたまま、しばらく下を向いていた。

「……美咲^{みさき}だけは、何か言ってくれると思つてた」

「うん」

「でも、言いに来てくれたから、もういい」

由香はランドセルから花もようの筆箱を出して、わたしに見せた。わたしはそれを受け取って、小さなボタンを指でなぞった。笑いたいのになぜか泣きそうになった。二人で校門を出ると、雨はいつのまにか上がっていて、水たまりに青い空がうつっていた。わたしたちは、ならんで水たまりをよけながら歩いた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十四回 祖父の死

おじいちゃんが亡^なくなったのは、まだ梅雨^{つゆ}のころだった。急に入院して、それから二週間もたたないうちのことだった。

夏休みに入ると、お母さんがカレンダーを見ながら「お盆^{ぼん}には、おばあちゃんの家に行こうね」と言^いった。

「わたしは、いい。宿題があるから」

お母さんは何か言いかけて、やめた。本当は、宿題なんてほとんど終わっていた。あの家のえんがわに、おじいちゃんがい^いない。それを見るのがこわかった。えんがわでいっしょにスイカを食べたことも、つりに行ったことも、思い出すと苦しくなるだけだった。

その夜、わたしはアルバムを本だなのおくにしまった。えんがわでおじいちゃんとスイカを食べている写真が、はつてあるアルバムだ。

十一月のはじめの日曜日、わたしはやつと、おばあちゃんの家に行った。お母さんに、柿^{かき}を取つてきてとたのまれたからだ。電車の窓から見える田んぼは、もう稲^{いね}かりが終わって、茶色い土が広がっていた。

門を入ると、庭の柿の木に、だいたい色の実がたくさんなっていた。えんがわには、ぎぶとんが一ま^いだけ出ていた。

「葵^{あおい}ちゃん、よく来たね。今年も、こんなに実がついたのよ」

おばあちゃんは物置から、長い高ばさみを出してきた。持つところが、おじいちゃんの手のおぶらで黒く光っている。

「おじいちゃんの代わり、たのめるかな。おばあちゃんじゃ、とどかないのよ」

わたしはだまってうなずき、高ばさみを受け取った。思っていたより、ずつと重い。うでがふるえて、先がふらふらとゆれた。去年までは、おじいちゃんがうしろから支えてくれていた。

えだの根元をはさんで、手元のひもを引く。ぱちん、と音がして、柿がかごに落ちる。一つ取るたびに、おじいちゃんの「うまいぞ」という声が聞こえる気がした。なつかしくて、うれしくて、それなのにむねのおくが痛^{いた}かった。

さいごに、木のいちばん上に一つだけ実が残った。

「それは鳥の分。おじいちゃん、いつもそう言^いってたね」

おばあちゃんが目を細めた。その目のふちが、少しだけ赤かった。わたしは高ばさみを下ろして、その一つを見上げた。

西にかたむいた日が、残った柿を、ともしびのように赤く照らしていた。

おじいちゃんは、もういない。それでも、柿の木は今年も実をつけた。わたしは高ばさみを、おじいちゃんがいっつも置いていた物置のかべに、そつと立てかけた。それから、えんがわでおばあちゃんとな^らんで、取ったばかりの柿を食べた。柿は、去年と同じあまい味がした。

第十四回 祖父の死 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十五回 無口な祖母

夕飯のとき、美咲は算数のテストをテーブルに広げた。赤い丸がならんで、上には大きく「百」と書いてある。クラスで百点は、美咲一人だけだった。美咲は、みんなに見えるように、わざとゆつくり紙をのばした。

「お母さん、見て。百点だよ」

母は「すごいじゃない」と手をたたいた。美咲は、向かいにすわる祖母の顔を見た。

祖母はテストをちらりと見て、「そう」とだけ言った。そして、また静かに煮物にものを口に運んだ。

美咲はテストを乱暴らんぼうにたたんで、ランドセルにおしこんだ。祖母がこの家に来て一年になる。朝、「おはよう」と言っても、祖母はうなずくだけだ。祖母のほうから美咲に何かを聞いてきたことは、一度もなかった。

「おばあちゃんって、わたしのこと、どうでもいいんだね」

部屋にもどってから、美咲は小さな声で言った。だれも聞いていなかった。ろうかの向こうの祖母の部屋は、その夜もいつまでも静かだった。

次の朝、美咲は台所の祖母と目を合わせないまま、「行ってきます」も言わずに家を出た。角を曲がったところで、水筒すいとうを忘れたことに気がついた。

走って家にもどると、門の前から二階の窓が見えた。窓のところに、祖母が立っていた。祖母は窓わくに手をそえて、少しせのびをするように、さつき美咲が曲がった角のほうを見ていた。

美咲は門の前で足を止めた。祖母は美咲に気づくと、あわてたように窓からはなれた。玄関げんかんを開けると、母が水筒を持って立っていた。

「はい、忘れ物。……おばあちゃんね、毎朝ああして、美咲が角を曲がるまで見てるのよ。雨の日も、寒い日もね。あの子は一度もふり返らないって、笑ってたわ」

美咲は水筒を受け取ったまま、しばらく動けなかった。昨日、テストを乱暴にたたんだ自分の手を思い出した。祖母にありがとうと言いたいの、ゆうべの言葉が胸につかえて、顔が熱くなった。

美咲は階段の下まで行って、二階に向かって「行ってきます」と言った。声が少しふるえた。上からは何も聞こえなかったが、ろうかが小さくきしむ音がした。

角のところで、美咲は初めてふり返った。

窓の中で、祖母が小さく手を上げていた。美咲は水筒をにぎったまま、うでがいたくなるほど大きく手をふった。祖母の手が、少しだけ大きく動いた。

そのとき、雲のすき間から朝の光がさして、二階の窓ガラスがきらりと光った。

第十五回 無口な祖母 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十六回 姉の受験勉強

姉の遥^{はるか}の部屋には、夜になると、いつも電気スタンドの白い光がともっていた。中学三年の姉は、高校受験をひかえた受験生だ。夕飯がすむと、姉はすぐに部屋にもどって、夜おそくまで出てこなかった。

ある日、わたしは姉がいらないあいだに、こっそり机^{つくえ}をのぞいた。ノートには色ペンで線が引かれ、図や矢印がきれいにならんでいた。まるで教科書のようなだった。ページのすみには、小さな字で「入試まで、あと百二十日」と書いてあった。

わたしは姉のいすにすわって、同じ色ペンを手に取ってみた。来年は、わたしも塾^{じゅく}に通って中学受験をしたい。姉みたいな受験生になるんだ。そう考えると、顔が自然にゆるんだ。

「千夏^{ちなつ}、何してるの」

ふり向くと、姉が立っていた。わたしはあわてていすからおりたが、姉は「いいよ」と笑って、わたしの頭を軽くなでた。

それから三週間たった、冬の夜のことだった。お茶を持って姉の部屋に入ると、姉は机にうつぶせていた。机の上には、模試^{もし}の結果の紙がある。点数は、前よりずっと下がっていた。

「お姉ちゃん、わたしもね、受験生になったら」

「遊びじゃないんだよ」

姉は顔を上げずに言った。机には消しゴムのかすが山のようにたまり、ノートは何度も消したせいで、ところどころ破れていた。ペン立ての色ペンは、ばらばらにたおれていた。

わたしは、お茶のコップを持ったまま動けなかった。きれいなノートの向こうに、こんな夜があるなんて知らなかった。受験生になりたいという気持ち、急に小さくなっていった。

しばらくして、姉がゆっくり顔を上げた。目のまわりが赤くはれていた。

「ごめん。言いすぎた」

姉はぶあついノートを一冊、わたしの前に置いた。表紙のかどが、丸くすりきれていた。まちがえた問題だけを書き写したノートだという。どのページにも同じ問題が二回も三回も書いてあり、最後に赤い丸がついていた。

「昨日できなかった問題が、今日できるとね。ほんの少しだけ、自分のことが好きになれるの」

わたしは赤い丸を指でなぞった。大変なのは、もう分かった。こわいの、指先がじんわりあたたかくなった。わたしもいつか、こんな丸を自分のノートにつけてみたい。

窓の外では、冷たい夜空に、星が一つだけ強く光っていた。

「お姉ちゃん、となりで算数のドリル、やってもいい」

姉は電気スタンドを少しずらして、わたしの場所を作ってくれた。

第十六回 姉の受験勉強 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。